物語の中で紡がれる淀君

細川　明李
（鍛治　宏介ゼミ）

目　次

はじめに
第一章　淀君について
第二章　江戸時代の淀君
　一、悪女のイメージのない淀君その一
　二、蛇となる淀君
　三、石田三成と共謀する淀君
第三章　明治時代以降の淀君
　一、大阪城に残る淀君
　二、ヒステリー質な淀君
　三、悪女のイメージのない淀君その二
　四、蛇性の肌の淀君
おわりに
注

はじめに

皆さんは、悪女というとどんな人物を思い浮かべるだろうか。我が国には、日本三大悪女として有名な人物がいる。一人目は、源頼朝の正室として知られている北条政子、二人目は室町幕府八代将軍の足利義政の正室で知られている、日野富子である。そして三人目は、この卒業論文でスポットライトを当てる、天下統一を果たした豊臣秀吉の側室である淀君である。現在の淀君のイメージというと、美人で恋多き女性というイメージや、豊臣家を滅亡に導いた人物などが挙げられると思う。このように淀君に対する、マイナスのイメージや、悪女として有名になるのはいつの頃からだろうか。このような疑問を、この卒業論文で明かしていきたい。

まず、第一章では淀君の本来の姿を、先行研究をまとめながら見ていく。そして第二章からは疑問を紐解いていくために、様々な時代に出版された物語を挙げていく。第二章では、豊臣秀吉の一代記とされている、様々な太閤記物をいくつか取り上げ、その中で淀君のイメージがどのように変化していくかを見ていく。第三章では、明治時代以降に記されたものを取り上げ、淀君のイメージの移り変わりを見ていく。

第一章　淀君について

この卒業論文の主題である淀君の生涯を、誕生から順に追っていく。その際に、いくつかの先行研究を中心にまとめていく（1）。

まず、彼女の呼び名であるが、淀君の本名は浅井茶々である。そして彼女が当時住んでいた場所によって呼び名が変わっており、二の丸殿や西の丸殿と呼ばれていた時もあった。また、淀君や淀殿、淀様という、現在でも聞き慣れた名前もある。しかし、淀殿という名前は、彼女が生存中に呼ばれたという事実は残っていない。淀君の「君」は、辻ミチ子氏の『女たちの幕末京都』では、「室町時代に売春婦を「立君」や「辻君」と呼んだ、卑しめの意味が込められていたものであった。それが茶々

が正当に評価されるなかで、心して淀殿というようになったのである。」と記されている。大野治長などと不義密通をしていたとされ、淫乱な女性というイメージによって、淀君という名前が定着したと考えられる。淀殿の「殿」と淀様の「様」の場合は、「様」付けで呼ばれる人の方が位の高い人であり、「淀殿」と呼ぶことのできる人物は、ごく限られた人物に絞られることになる。よって、当時の彼女の呼び名は「淀様」が妥当であると思われる。今回の論文の中では、売春婦云々の話もあるが、私が彼女について初めて調べた、『絵本太閤記』の中の「淀君行状」に合わせて「淀君」と記述することにする。

淀君は、永禄十二年（一五六九）に近江国小谷城主浅井長政と、織田信長の妹のお市の方の間に生まれた。そして淀君には二人の妹がいて、翌年の元亀元年（一五七〇）には初が生まれ、天正元年（一五七三）には江が生まれ、三姉妹であった。しかし、家族との幸せな時間は長く続かず、三女の江が生まれた年に父長政と叔父にあたる織田信長による戦い（姉川の戦い）によって父をなくしてしまう。小谷城は落城し、母と三姉妹は城を抜け出し、信長の陣に引き渡された。この時、淀君は五歳の少女だった。その後、母と三姉妹は尾張の清州城に身をおいた。

天正十年（一五八二）、信長が本能寺において家臣の明智光秀によって討たれる事件により（本能寺の変）、信長が亡くなると信長の後継者争いが勃発する。これが清州会議である。この会議で、主導権を握った豊臣秀吉と対立していた柴田勝家と母お市の方は再婚することになった。そして、勝家の居城である越前北の庄城に入ることになった。ここでの暮らしも長くは続かず、天正十一年（一五八三）には勝家と秀吉が対立することになった（賤ヶ岳の戦い）。秀吉軍が北の庄城を包囲すると、勝家は覚悟を決めて自刃することを選んだ。小谷城の時と違い、母お市の方も勝家と共に自刃してしまい、母との永遠の別れとなってしまった。三姉妹は、秀吉の陣所に送られた。淀君はこの時、十五歳であった。

北の庄城が落城してからの淀君の行動はあまり分かっておらず、秀吉の側室となったのは天正十六年（一五八八）頃とされている。秀吉にはたくさんの側室がいたが、唯一秀吉の子をなしたことで、寵愛された。正室の北政所との関係においては、不仲と言われることがあるが実際とは異なっていたとされる。堀智博氏は、「秀吉は淀とねねを合わせて「二人のかかさま」と呼んでおり、子のある・なしで両者の間に亀裂が生じないよう、いずれも鶴松の母として平等に処遇していたことが分かる。この点は次子秀頼が誕生した際にも順守されており、そのため、鶴松・あるいは次子の秀頼の誕生をめぐって、ねねと淀の間に深刻な対立は生じていなかったと言えるだろう。」と指摘している（2）。また、慶長三年（一五九八）に秀吉が亡くなり、政治の世界から退いた北政所は、大坂城に残っていた淀君に金銭的な支援も行っていた。慶長五年（一六〇〇）に起こった関ヶ原の戦いでは、敵方の城にいた松の丸（京極龍子）を、淀君と北政所が協力して救出している。淀君と北政所が、日常的にやり取りをしていたからできたことである（2）。

天正十七年（一五八九）に、淀君は秀吉との子どもを懐妊する。秀吉は淀君の懐妊を祝い、淀城を築城し、ここを産所とした。この時秀吉は五十三歳、淀君は二十一歳で待望の男子を授かり、鶴松と名付けられた。淀君は鶴松を生むと、すぐに大坂城に移った。鶴松が生まれた頃から、淀君の消息がうかがえるようになる。しかし、北政所のように秀吉政治に介入したりすることはなく、あくまでも自身の子育てが中心で、表舞台に出てくることはなかった。しかし、鶴松はとても病弱だったため、天正十九年（一五九一）にわずか三歳で亡くなってしまう。鶴松の葬儀は妙心寺で行われ、葬儀が終わると秀吉は京都阿弥陀嶺の麓に祥雲禅寺を建立し、鶴松の菩提を弔った。

鶴松を失った秀吉は、その年に関白職を甥である秀次に譲り、自身は太閤と呼ばれるようになった。そして、朝鮮出兵の準備を始め、名護屋への陣を進めており、淀君も一緒に名護屋に赴いた。そんな中、淀君は第二子である、拾（後の豊臣秀頼）を授かった。詳しい日時は分かっていないが、懐妊した淀君は名護屋から大坂城に戻った。そして、文禄二年（一五九三）八月三日に、無事に大坂城の二の丸で拾を出産した。その後、拾の上洛に伴って伏見城へ行き、伏見城西の丸で淀君と拾は共に過ごし、淀君は西の丸と呼ばれるようになった。

時を少し戻し、文禄二年（一五九三）十月、拾が生まれて二ヶ月が経った頃秀吉は、拾と関白秀次の娘を婚約させることを決めたのである。し

かし、二年後の文禄四年（一五九五）七月に、秀次は謀反の疑いがあるとされ、秀吉によって高野山に追放され切腹してしまった。その後、秀次の妻子たちも捕らえられ処刑されてしまったので、この婚約はなくなってしまった。この一連の事件は、秀次事件と呼ばれるようになった。第二章において、物語の中の秀次事件について記述しているが、事実とは異なっている。実際の秀次事件は、秀吉は秀次に切腹をさせるつもりはなく、事が収まるまで高野山住山を目的としたものだった。しかし、謀反の疑いをかけられた秀次は、自身の潔白を示すために自刃してしまったのである。この事が世間に広がり秀吉政権に動揺をもたらすことを恐れた秀吉は、秀次謀反によって切腹命令を出したという「公式見解」を流した。そしてこの事が世間に広がり、秀吉が流した「噂」が、当時の人たちの「現実」となったのである（3）。その中で、秀次の悪評が広がり、物語の中にまで影響していったのではないかと推測する。

慶長元年（一五九六）頃から、拾は秀頼と名を改めた（これから後、秀頼と統一する）。そして、淀君と秀頼は大坂城で過ごすことになる。そして慶長三年（一五九八）三月に、京にある醍醐の三宝院で花見が行われた。醍醐の花見である。この花見に淀君は、自身の子どもである秀頼と共に参加している。いくつかの太閤記物に、醍醐の花見における輿の順番が記されているが、これは第二章で詳しく見ていくことにする。そして、八月に秀吉は六十二歳で亡くなる。その後は、秀吉の遺言に従って、徳川家康は京に残り政権を担当した。これは秀頼が成人するまでの間の後見人としての役割であった。秀頼は、前田利家を守役として翌四年に大坂城に移った。この時、当然ながら母である淀君も共に大坂城へ移り、大坂城が落城するまでの十七年間を過ごすことになる。秀吉死後の淀君は、豊臣政権の政策の一つであった全国の寺社修造に力を入れていた。幼い秀頼に代わって淀君が主導権を握っていた（2）。

しかし、秀吉が頼りにしていた利家はその後病死してしまい、秀頼補佐計画は崩れてしまう。そんな中、慶長四年（一五九九）になると、石田三成と豊臣恩顧の者たちの間で争いが起こったり、正室の北政所が大坂城を出て大坂城を家康に明け渡したのである。北政所は京都新城に移り、大坂城を離れることのできない淀君に代わり、朝廷との関係を築き上げたり、秀吉の菩提を供養することに専念していた。二人は、役割を分担して連携を取りながら豊臣家のために尽力していた。北政所と淀君の連携は、慶長五年（一六〇〇）に起きた関ヶ原の戦いにおいても発揮された。戦場の一つであった、近江大津城内にいた京極龍子を使者を使い、救出したのである。この戦いに勝利した徳川家康は、実質的な天下の支配者となった。

慶長八年（一六〇三）七月、秀頼は以前より婚約していた千姫と結婚した。秀頼は数えで十一歳であった。千姫は、徳川秀忠と淀君の妹である江の間に生まれた子どもで、数えでまだ七歳であった。二年後の慶長十年（一六〇五）には、家康が子の秀忠に将軍職を譲り、秀忠の将軍襲職のために、秀頼に上洛を促した。淀君は、この上洛には反対した。まだ十三歳だった秀頼を一人で上洛させることに不安を感じたのである。

その後、淀君と秀頼は大坂城で穏やかに暮らしていたが、慶長十六年（一六一一）頃から雲行きが怪しくなった。この年、後陽成天皇の譲位があり、家康ら諸大名も次々と上洛していた。その中で、家康は秀頼に上洛を促し、二条城で対面したのである。この時秀頼は十九歳の青年に成長しており、淀君が上洛に反対したという話は伝わっていない。淀君は、秀頼が無事に帰ってくることを大坂城で祈っていたであろう。上洛を果たした秀頼の人気は高く、立派に成長した秀頼を見た家康は、秀頼を評価しつつ脅威を感じたのかもしれない。

そして慶長十九年（一六一四）、豊臣家滅亡への歯車が回り始めたのである。秀頼は秀吉の死後、寺社の再建に力を入れていて、中でも方広寺再建には力を入れていた。同年四月頃には方広寺は完成したが、鐘銘と棟札に問題があると家康が指摘してきたのである。鐘に掘られた「国家安康」と「君臣豊楽」が、家康の名前を分断して、豊臣の栄華を祈ったものであると主張したのである（方広寺鐘銘事件）。豊臣方は弁解のために、秀頼の家老である片桐且元を駿府へ送ったが、家康に会えないまま一ヶ月ほどが経った。これにしびれをきらした淀君は、大蔵卿局らを使者として駿府に向かわせた。家康に会うことのできた大蔵卿局らは、秀頼と淀君を咎めることはない、という家康の言葉を聞き帰された。一方の且元はというと、大蔵卿局らと合流し、秀頼や淀君に伝える内容を

確認していた。且元は全くの私案として、

一、秀頼は大坂城を出て、伊勢か大和の他所へ移る。

一、秀頼は諸大名と同じく駿府と江戸に参勤する。

一、かつて秀吉も母親の大政所を三河の岡崎に人質に出した例もあるから、淀殿を人質として関東へ出す。

という提案を出したのである。これを聞いた淀君は、且元の裏切りと考えて切腹を迫った。十月になると、秀頼籠城の噂が起こり、この噂が板倉勝重によって家康のもとへ届けられて、これが大坂の陣につながることになる（4）。

切腹を命じられ豊臣から離反した且元だったが、もとは淀君や秀頼からの信頼も厚い人物だった。しかし、両者の間で食い違いが起こり離反という結果となってしまった。次第に淀君と秀頼は孤立して、徳川方と対立していくことになる。そんな中、福島正則は淀君と秀頼の命を守るために、豊臣家と徳川家の和議を進めた。その頃大坂城では、淀君が決断を渋っていた。すると家康は、大坂城への銃撃を開始したのである。これにはさすがに驚いた豊臣方は、大坂城の城割りという講和条件を飲むことにした。そして、大坂城の堀は埋められ、裸城となった。これが、慶長十九年（一六一四）十二月に起こった、大坂冬の陣である。

講和条件を飲んだ後も、豊臣家は徳川への警戒を怠ることはなく不穏な動きは続いていた。そんな中、慶長二十年（一六一五）二月頃から、織田有楽が大坂城を退去するという話が出てきた。しかし、有楽の願いは叶うことなく時は過ぎ、同年四月に有楽は家康の元に使者を送り、豊臣方が戦支度をしていることを報告した。これを聞いた家康は家臣たちに出陣を命じ、大坂夏の陣が幕を開けることになる。そして、五月七日に大坂城は落城し、翌八日に淀君は秀頼と共に自害し、豊臣家は滅亡するのである。淀君四七歳、秀頼二十二歳であった。その一年後の元和二年（一六一六）に、京都の養源院にて仏事が行われた。施主は秀忠の妻であり、淀君の妹である江であった。淀君、秀頼、秀頼の息子の国松の供養塔は京都の三宝寺の境内に建てられ、現在では縁結びの塔として知られている。

ここまで淀君の生涯を巡ってきたが、ここからは第二章からのキーワードになる事柄を三つ挙げて、淀君との関係性を見ていく。

まず一つ目は秀吉の正室である北政所との関係である。北政所と淀君というと対立関係にあったと誤解されることがよくあるが、実際はそうではないことが近年分かっている。淀君に子どもができた時、秀吉は淀君と北政所を合わせて「二人のかかさま」と呼んでいる。これは、淀君と北政所の間に亀裂が入らないようにと考えた、秀吉の配慮が見られる。その甲斐もあってか、秀吉が亡くなった後も二人の関係がくずれることなく続いた。出家した北政所は、豊臣家と朝廷を結ぶ特別な立場となった。こうした北政所の活動を、淀君は承認していて、金銭的支援を行っていた。このように、淀君と北政所は立場は違っていたが、豊臣家のために協力を怠らなかった（2）。

二つ目は、関白秀次事件への関与の有無である。前にも記述した通り、淀君が関与していたという事実はない。第二章でとりあげる、『絵本太閤記』や『真書太閤記』の中の、淀君が石田三成と共謀して秀次を亡き者にするという話は、物語の中で作られた話になる。

最後に、淀君と三成の関係性はどのようなものだったのか。淀君と三成は深い関係にあり、秀頼は三成との間に生まれた子どもであるという話も聞くが、このような事実はない。淀君と三成の怪しい関係性は、物語の中で作られた虚像であり、それが現在にも伝わり強い印象を残している。

第二章　江戸時代の淀君

第二章では、江戸時代に出版された豊臣秀吉の一代記とされる、様々な太閤記物の中で、淀君がどのような女性として描かれているのかを見ていく。なかでも、関白秀次事件と言われる一連の事件においての淀君や、醍醐の花見の中の輿の順番などを中心に、『太閤記』、『絵本太閤記』、『真書太閤記』を見ていく。また、『絵本太閤記』の中では他の太閤記物には見られない、淀君が蛇に変化するという記述があるので、蛇になる女性について考察していく。

一、悪女のイメージのない淀君その一

『太閤記』は、豊臣秀吉の事蹟を書きとめた記録で、小瀬甫庵によって書かれた。寛永二年（一六二五）に自序、二十二巻まである。巻一から十六は秀吉出生から晩年を描いていて、最後は最も華やかだった慶長三年（一五九八）の、醍醐の花見で締めくくられている。巻十七は秀次事件、巻十八は織田酒造丞らの逸話、巻十九は中山鹿助伝。巻二十・二十一は、元和二年（一六一六）の旧著である、『八物語』を収め、甫庵の儒教思想を展開している。巻二十二は、黄母衣衆など、豊臣期の職制について略述されている。そして、幕末期に栗原柳庵によって書かれた『太閤記』をはじめ、『太閤記』を元にして作られた実録は『太閤物語』と称され、講談師によって広く語り継がれた（5）。

作者の小瀬甫庵は、江戸時代前期の儒医で、永禄七年（一五六四）に尾張春日井郡で生まれた。医術を家業として、豊臣秀次に仕え、『太閤記』などの作品を残し、医学の他に儒学や軍学、歴史にも精通していた。寛永十七年（一六四〇）に、七十七歳で亡くなる（6）。

『太閤記』の中で、おそらく最初に淀君の記述が出てくるのは次の場所である。

史料1

勝家切腹之事

（前略）

勝家、小谷の御かたに被申ける。御身は信長公之御妹なれば出させ給へ。つゝがもおはしますまじきと有しかば、小谷御方なみだぐませ給ふて、去秋のり岐阜よりまいり、斯みゝえぬる事も前世之宿業、今更驚べきに非ず。こゝを出去ん事思ひもよらず候。しかはあれど、三人之息女をば出し侍れよ、父之菩提をも問せ、又みづから跡をも弔れんためぞかしとのたまへば、いと安き御事なりとて、其よし姫君に申させ給ふ。姉君、いやよと、母上共に、同じ道に行ん物をと啼悲み給ふを、文荷斎そのわけをも不聞入、御手を引立三人を出し奉りぬ。（中略）

これは、淀君の母であるお市の方の二番目の夫である柴田勝家と、豊臣秀吉が戦った賤ヶ岳の戦い（一五八三）を描いたものである。その中で、勝家はお市の方に城を出るように言うが、お市の方はそれを断り、一緒に果てることを決断する。母と一緒にいたいと言っていた三人の娘たちは、城から出るように促した。この時に出てくる、「姉君」という人物が淀君だと思われる。

そして、醍醐の花見の記述にも淀君が出てくる。

史料2

惣構之内へ出入人々奉行事

（前略）

御輿之次第

一番　政所殿
二番　西之丸
三番　松之丸
四番　三之丸
五番　加賀殿　利家卿之息女
六番　東御方　但利家卿女中

（中略）

これは輿の順番を示したものである。一番目は、秀吉の正室である北政所、二番目に淀君がいる。この時淀君は、伏見城の西の丸に住んでいたので、西之丸と呼ばれていた。三番目の松之丸は、秀吉の側室の一人である京極龍子、四番目の三の丸は、織田信長の五女で名前は不明だが、当時伏見城の三の丸住んでいたとされる。五番目の加賀殿は、前田利家の三女でお摩阿という。六番目の東御方は、前田利家の正室である（7）。輿の順番だが、これより後に記述する『絵本太閤記』や『太閤記物語』と異なっている。

そして、『太閤記』の中の関白秀次事件においては、淀君が関係しているという記述は見られなかった。『太閤記』の中の関白秀次事件は次のような内容である。秀次は関白になってから、素行が悪くなり鹿狩りなどにも兵を出していたので、太閤秀吉への謀反を疑われるようになっ

た。誓紙を提出し、一旦嫌疑は晴れるものの、石田三成の讒言などもあり、秀吉への対面は叶わなかった。そして、高野山への追放が決まり、秀次は亡くなってしまう（8）。

以上のことから、慶長期に書かれた『太閤記』には淀君にスポットライトを当てた話は出てこないことが分かり、まだ淀君の悪女のイメージは作られていなかったと思われる。

では、『太閤記』より前に書かれたものの中ではどうだろうか。元和七年（一六二一）から九年（一六二三）にかけて、秀吉に仕えていた川角右衛門が著したとされる、『川角太閤記』を見ていく。全五巻からなり、天正十年（一五八二）の明智光秀の謀反から筆を起こし、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いで筆を結んでいる。秀吉生涯の伝記を書こうとした意識は見られず、川角右衛門が上司の命令などによって書き上げたか、誰かの依頼によって記述したものと思われる（9）。

史料3

一浅井殿後御謀叛故御成敗被成候御妹後家にて御座被成候柴田殿江被遣候秀頼様御袋ハ浅井殿御息女にて御座候事

右の文章が淀君の記述である。内容としては、浅井殿というのは、淀君の父親である浅井長政のことで、長政が謀反によって亡くなる。御妹は、織田信長の妹で長政に嫁いだ、淀君の母親であるお市の方である。長政が亡くなった後、お市の方は柴田勝家に嫁いだ。「秀頼様御袋ハ浅井殿御息女」というのが淀君のことである。

このように、『川角太閤記』の中でも淀君の記述はとても少なく、悪女をイメージするものは一切なかった。なので、少なくとも淀君が生きていた頃には、淀君を悪女として描いていたものはなかったと思われる。

二、蛇となる淀君

『絵本太閤記』は、七編八十四冊からなり、寛政九年（一七九七）から享和二年（一八〇二）の間に書かれた絵本である。武内確斎が著し、岡田玉山が絵を描いた。豊臣秀吉の一代記でありながら、禁令に触れて文化元年（一八〇四）に絶版になった（10）。

著者の武内確斎は、明和七年（一七七六）に生まれ、儒学を学びながら長編の絵入り読み本を執筆し、文政九年（一八二七）に五十七歳で亡くなった。岡田玉山は、江戸時代中期から後期に活躍した画家で、近世板刻密画の開祖と呼ばれ、『絵本太閤記』をはじめとする様々な作品を残した。そして、文化五年（一八〇八）に亡くなった（11）。

これより、『絵本太閤記』の中の淀君の記述を見ていく。

史料4

石田三成智陥関白

太閤の御愛妾淀の御方は拾君を生み玉ひし後は其威勢以前に百倍し諸侯太夫内外の諸臣に至る迄敬ひ尊とみ奉事北の政所よりも猶重し淀君其有様を見玉ふに付てつら〳〵思惟し玉ふは若君の誕生ましますといへども既に秀次公御遺跡に定り玉ひ関白職をさへ譲り玉ふ上は太閤百年の後此若君僅に一国の主と成臣の禮を以て秀次に仕へ玉はんこそ恨めしけれ其上秀次公何なる悪心を起し若君を失はんと計れんも知るべからず先んずる時は人を制す太閤御在世の内に秀次公を亡し捨をば御跡目のことにつき誰かことを否ふべきと心を定たまひ石田治部少輔三成を密に召れ此事を談じ給ふ（中略）内々関白へ美女を送り（中略）計略をめぐらし只一挙に関白を亡さん事何の難事が候べきと事もなく申しければ淀君大いに歓び賜ひ此謀計極てましとて猶も三成と事を談じ（中略）秀次公計とはゆめにも知せ賜はず今は少も憚り賜ふ気色もなく日々悪事増長し百姓町家の妻女を奪ひ日毎に城の天守に上り道行人を打殺し以て其を戯れとし（中略）

この章では、石田三成が関白の豊臣秀次を亡き者にするために策略を企てたことが描かれている。その中で、以前より秀次の行動に不満を持っていた淀君が、自身の子どもである拾君（後の豊臣秀頼）を跡目にするために三成と協力して策略を練った。三成の企てた策略に淀君は大いに喜び、秀次を油断させるために美女を送り込んだ。これが罠とも知らない秀次は、以前よりも酷い行いをするようになった。

史料5

秀次公悪行

先帝正親町崩御ましまし當今の帝をはじめ参らせ月卿雲客悉く悲みの涙せき敢させ玉はず真に一天の主万乗の君の御斎なればにや日月の光も薄く神慮も苦しみ玉ふらん王城守護の神社悉々く門を閉て人の参詣をだにいとへばまして人間における貴きも賤もともに愁を示しけるされば猟漁も禁ぜられ物さびしき世の中にも関白秀次公は更に玉ふけしきなく明暮酒宴亂舞に日を過し（中略）

是皆おまんの方の悪事に荷担し君を誘ふて滅亡に及しむ眞に殷の妲己周の褒似に異ならずと心有者はつま弾して悪みける理なるかな此おまんの方といふは淀君の侍女唱といふ女なるを植木屋の娘となし秀次公へ献せしは淀君三成が計ことにて行ふ悪事も皆淀君の指図によれり（中略）

この章でも、三成と淀君が共謀して秀次を陥れる作戦を企んでいる。そんな中で、石田三成智陥関白と異なる箇所は、淀君の侍女であるおまんの方という女性が登場していることである。計画を考えたのは、淀君と三成であり、計画を実行したのはおまんの方というような記述である。

次に、醍醐の花見についての記述を見ていく。醍醐の花見とは、慶長三年（一五九八）三月十五日に豊臣秀吉によって京都の醍醐寺によって模様された大規模な花見のことである（12）。

史料6

醍醐之花見

定め置れし花見の日なれば辰の刻今伏見城を出させ給ふ御輿の次第は一番に北の政所二番は三條の君三番は松の丸君四番は太閤御若君を具し輿にめされ給ふ五番は淀の君六番は加賀の君（中略）北政所及び淀君以下の女房達みな麗しき重の衣思ひ〳〵に着飾（中略）

醍醐之花見では、まず輿の順番が記されている。一番目に秀吉の正室である北政所、二番目に三條の君、三番目に松の丸君（京極龍子）、四番目には太閤御若君（秀頼）、五番目に淀君、六番目には加賀の君（前田摩阿）となっている。そして、思い思いの衣装に身を包み、花見を楽しんだとされ、争い事などの記述はなかった。

『絵本太閤記』には、他の太閤記物には見られない淀君の記述があるので見ていく。前半の内容は、慶長三年（一五九八）の春の頃より、秀吉は容態が優れず北政所や淀君らは心配し、有名な薬師を呼び寄せたが、容態はよくならなかった。そこで、秀吉は三成を呼び寄せ、肥前の名護屋に下向するように命令を下す。これに従った三成は権力を持ち始め、秀吉の病気は治らず、様々な噂が飛び交うようになる。大名たちも集まり話すうちに、北政所と淀君の話になっていく。

史料7

淀君行状

（前略）

宮中の女将軍北政所淀君両方に互角して若も太閤忌べあらざるの御事有ば兎して角してなんど心の刃を研給へば諸国の大名小名或は政所へ荷担し淀君の味方に與しいかなる亂れ起るらんとさてこそ騒ぎ罵りける譯て淀君は嫉妬深くましまして日頃政府の御方へは加藤福島浅野黒田をはじめ堅固の大名あまたさんじ（中略）妬しく口惜く思ひ暮し給しに剰へ若君の御貌太閤に似給わゑとて政所方の人々兎角に私言あへるなど深く恨み思めしあはれ一人にても方人と頼む人の多かれかしと大名小名陪臣に至る迄艶言を以て之を懐け眸を凝して人を釣給に又茲に甘心し命を棄て参り仕る者少なからず然るに今年五六月に至りて太閤御心地常ならず見へさせ給ば淀君深く心を苦め給（中略）うるはしき花の顔ばせも肉落て色青みはやくも肌に皺を生ひたり（中略）

諸国の大名小名から人気があった北政所に比べて、淀君には味方がいなく妬ましく思っていた。また、自身の子どもである秀頼の容貌が秀吉と似ていないといった噂も飛び交っていた。その中で、味方を一人でも増やすために様々な人を甘い言葉で誘惑したが、誘いを受ける者はいなかった。そして秀吉の容態が回復しないまま、さらに淀君は心を苦しめ

美しかった容貌も変化し始めた。

このように、前半では正室の北政所を善、側室の淀君を悪として対比させている。後半には、容貌が衰えた淀君は、永遠の美貌を手に入れたいと考えるようになった。そして日瞬という僧侶を呼び寄せ、怪しい法力を使って美貌を手に入れようとする。

史料7（続）

（中略）御生身の肉一寸を切て拙僧に賜らば其肉身に経文を讀入れ倶に行法を積で御願を充し奉んと申ければ淀君大きに歓び給ひ元来心気勇壮の女性なれば短刀を抜て内股の肉一寸斗り切取て賜ける（中略）大蛇顕はれ（中略）大蛇を近くに招き彼淀君の生肉をあたへて其を喰しめ又大蛇の肉一寸を切取て（中略）伏見の城に歸り淀君に謁し蛇肉を以て内股の疵口に納め淀君の御容日毎にうるわしく頬の膩のつやゝかなることは櫻花の露を含めるごとく視るもの心を蕩かし志を失ふ淀君も又淫心頻りに生じて制しがたく嫉妬の心いよ〳〵深くならせ給ひ人を恨み物を妬むの余りには顔色變じて朱の如く心熱頭上に突出て焔と成り後には口耳の脇まで廣がり息あへぎ紅の舌長くのび恐ろしきと言ん方なく御側の侍女等避け隠れて見る者なく半時斗にして夢の覚めたるごとく妬心しづまり御容婦艶と常に異給ふことなしされば近く仕ゆる侍女近士は勿論家老用人の輩迄聞傳へて不思議のことに私言合ける

永遠の美貌を手に入れるための怪しい法力とは、淀君の内股の肉を一寸切り取り、これを大蛇に食わせ、淀君の肉を食べた大蛇の肉を一寸切り取るという方法だった。そして、その大蛇の肉を淀君の内股に入れることで、怪しい法力は完成する。淀君は、ためらいもなく自身の内股の肉を切ったのである。これにより淀君の容貌は日に日に美しくなり、複数の男性と関係をもった。それでも淀君の嫉妬心は消えることなく、最後には顔が朱色に変わり、心熱が頭上から炎となって出てきた。また、口が耳まで裂け舌が伸び恐ろしい姿となった。それを見た侍女たちは、不思議なことだったと言い伝えた。

これまで『絵本太閤記』の内容を見てきたが、どの記述も淀君を悪として描いていることが分かった。石田三成と共謀して豊臣秀次を暗殺しようとしたり、永遠の美貌を手に入れるために怪しい法力を使っていた。正室の北政所と対比させることで、淀君の悪のイメージをより強調している。物語の中で構築された淀君のイメージは、時代の流れとともに変化していく。そして、『絵本太閤記』の中のイメージが少なからず後世の物語にも影響を与えていると思われる。

では、『絵本太閤記』の淀君のように、女性が蛇になるということについて詳しく考察していく。飯倉洋一氏の「『絵本太閤記』「淀君行状」と『唐土の吉野』」という論文には、次のようなことが記述されている（13）。

淀君の蛇体変化の元になったであろうと思われる話として、飯倉氏は『唐土の吉野』巻三「桂の方金龍の法を修して肉親を殺事」を挙げている。『唐土の吉野』は天明三年（一七八三）に、大坂伊丹屋善兵衛が版元として刊行され、半紙本五巻五冊の十篇の短編を集めたものである。その中の第六話である、「桂の方金龍の法を修して肉親を殺事」（以下「桂の方」と略す）は次のような内容である。

史料8

東国の或る大守は四十になっても子がないため、妻の甥を養子とした。しかし、大守六十の時、側室桂は男子を生むや、大守を籠絡し、奸計を以て養子を追い出さんと謀り、また美貌を保とうと、日栄という法華僧に金龍の修法を頼み、陰部の生肉を贄として法力を得たが、大守の死後は家士に見放されて、我が子を食い、蛇となって姿を消す。

大守と桂の方は、秀吉と淀君を連想させる内容である。また、桂の方が美貌を手に入れるために行った金龍の法も同じで、後に蛇に変化するところまで同じである。簡単ではあるが、「淀君行状」と「桂の方」の類似点をまとめる。

・「淀君行状」

①日蓮宗の日瞬という僧侶

②来世成仏ではなく、今の幸せ（美貌を手に入れること）。
③淀君の肉を日瞬に渡し、その肉を食べた大蛇の肉を取り、淀君の傷口に入れる（金龍の法）。
④顔が朱色になり、口も耳まで裂けて恐ろしい形相になり、蛇に変化する。
⑤今までの美しさを取り戻したが、淫心を制御することができず、複数の男性と関係を持つようになった。

・「桂の方」
①日蓮宗の日栄という僧侶
②後世のことではなく、今の自分の美しさを保ちたい。
③桂の方の肉を日栄に渡し、龍の肉を桂の方の傷口に入れる（金龍の法）。
④顔色が朱色に変化し、その姿を見た者は、目がくらみ力を奪われ動くことができなくなった。
⑤顔色や気力ももとに戻ったが、淫心は増し、美少年たちを帳台に招き入れた。

（①誰に頼んだか、②願い、③方法、④変化、⑤その後）

以上のことから、「淀君行状」の蛇体変化と「桂の方」の話には関連があることが分かった。しかし、「桂の方」が「淀君行状」の典拠であるとは断定できない、と飯倉氏は指摘している。その中でも、「淀君行状」は「桂の方」を参照にした可能性は年代的（「淀君行状」は一八〇二年、「桂の方」は一七八三年）にもあり得ることで、その他の太閤記物などには淀君の蛇体変化が記されていないことからも推測できると飯倉氏は述べている。

日本において、女性が蛇に変化する話には三つの目的があるとされている。一つ目は、「古代アニミズムの神話体系を原郷とする水の精霊の民談」であり、「それらは昔話、伝説、山川沼沢の由来・起源のかたちで、自然の神々と人々のかかわりを語った説話群」である。二つ目は、「中世社会にわきおこった仏教唱導の隆盛を背景に、自然神の仏法への帰順を語る」もので、「土着の水精（竜女）を救済した各宗高僧のたぐいまれな法力を話の中心とし」たものである。三つ目は、前者の二つをふまえた、「江戸期の小説、芝居、浮世絵などの表現文化のなかに、恋の懊悩や嫉妬に狂う執着のこころねを因として蛇身に変化する女たちの怪異譚」である（14）。「淀君行状」における、淀君の蛇体変化は三つ目に該当していると思われる。

「道成寺物」として能楽や人形浄瑠璃、歌舞伎などで有名な話がある。若い修業僧である安珍は、恋仲になった清姫との約束を破って清姫のもとから姿を消した。裏切られたと思った清姫は、安珍を追いかけ、恨みや怒りのあまりに蛇の姿になった。寺の鐘の中に逃げ隠れた安珍だったが、蛇となった清姫によって鐘ごと焼き殺されてしまった（15）。このように古くから、嫉妬に狂った女性が蛇に化けるという話があった。「道成寺物」は、「蛇と女」を連想させる物語として最も古いものであると、高田衛氏は指摘している。

ここで『絵本太閤記』に描かれている淀君の姿に注目していく（図1（16））。淀君が着ている着物の模様に、黒い三角形の模様が描かれている。これを鱗形模様という。元禄期（一六八八～一七〇四）から宝永期（一七〇四～一七一一）にかけて、歌舞伎の世界において嫉妬で狂った女性の成れの果てを蛇の姿で表現することが流行した。その際に、演じている人間が鱗形模様の着物を着て演じていたり、時には大蛇の造り物を使用して見ている人を驚かせた（図2（17））。このように、元禄期前後から歌舞伎の演目で女人蛇体が多く見られていた。なので、『絵本太閤記』の中の淀君が着て

図1（16）

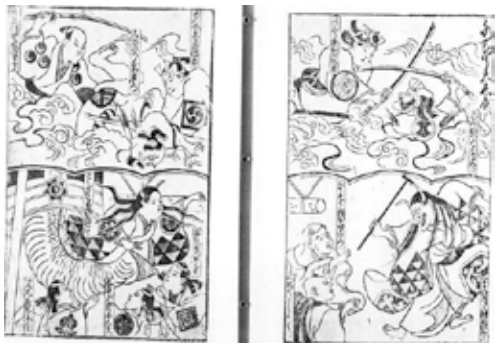

図2（17）

いる鱗形模様の着物や、嫉妬に狂った淀君が蛇の姿に変化するという話も、少なからず歌舞伎の演目に影響されていると考える。

三、石田三成と共謀する淀君

『真書太閤記』は、嘉永五年（一八五二）から慶応年間（一八六五～六八）に栗原柳庵によって編集された実録風読物である。一二編三六〇巻からなる。講談の題材になっていた太閤真顕記などをまとめたもので、豊臣秀吉の一代記である（18）。編者の栗原柳庵は、寛政六年（一七九四）から明治三年（一八七〇）に生きた人物で、幕府の家人である（19）。

これより、『真書太閤記』の中の淀君に関する記述を見ていく。

史料9

太閤殿下洛中洛外伏見御下行の事並淀殿秀次公を讒言の事

（前略）

又淀君は若君を世に立てんと謀り、一向に秀次公を亡ひ奉らんと計議を廻し、間者を以って帝都の様子を窺はせらるゝに、彼者ども密に秀次公の御身持の次第を淀殿へ申し上げしかば、淀殿大に悦び三成と密々に計略を約し、（中略）

中略の前の内容を説明すると、太閤秀吉は伏見に城を築いた後、下賤の者たちからも熱い信頼を得て、都はとても繁栄していた。一方で、秀次公は酒に溺れ仕事を怠っていた。それを見た淀君は、自身の子供である秀頼を後継者にするために秀次公を暗殺する計画を石田三成と共に立てる。間者を立てて、秀次公の情報を集めた。

史料9（続）

（中略）

君数年の間千辛万苦して漸々と一統に治め給ひし世を他人に奪はれん事を残念至極には思し召されずやと言葉巧に秀次公を讒せしかば

（中略）何なる賢者も我子の愛に迷ひ易く、流石の秀吉公も淀殿の辨舌に御心を動かせられ、秀次もし異心あらば、若子の身の上危しと思召し、其後五奉行の輩を召し出されて御尋ね有りけるは、秀次身持放埒にして政事を忘れ、其上陰謀の企ある由、其實あるや。若し、實事ならば父子の間なりとて用捨すべきにあらず。（中略）野心なき旨を書記して使者に渡されければ、五人の輩請取りて伏見に帰り、太閤の御前に披露ありけるに然もあるべき事と宣ひ、先づ一應は事なく治りしにより、上下押並べて悦び安心せり。誠に一犬虚を吠ゆれば、萬犬實を傳ふるの習ひにて、秀次公陰謀の思し召なしと雖ども、諸人是を有る事と思ふは、秀次公の御運の末とぞ見えにける。

集めた情報をもとに淀君は、秀次が天下を狙っているなどの嘘の情報で秀吉を言葉巧みに操った。流石の秀吉も我が子のこととなると、不安に思い使者を使わして秀次の話を聞く。秀次は驚き、自身の潔白を示すために髪を切り使者に渡す。秀次の陰謀が嘘であったとしても、一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝うように、一人がいいかげんなことを言うとそれが事実として広まってしまうものである。

『真書太閤記』には淀君が蛇に変化するという記述はなかったが、石田三成と共に陰謀を企て秀次公を亡き者にしようとしており、そこから淀君＝悪女のイメージがよく分かる。

第三章　明治時代以降の淀君

前章では、江戸時代に出版された太閤記物を中心に淀君の記述を見てきたが、第三章では、明治時代以降に出版されたものを中心に見ていく。明治時代のものでは、「浪華民俗雑談」と『日本艶女伝』の二作品、大正時代では『太閤記物語』、昭和時代では『おんな太閤記』を取り上げて、淀君のイメージがどのように変化していったのかを考察していく。

一、大阪城に残る淀君

「浪華民俗雑談」とは、作者の三井武三郎が少年時代に聞いた話を綴ったものである。その中に、自身の母から聞いた話の中に淀君の話が出て

くる。

母親から聞いた時期だが、「明治十乃至廿年頃の見聞を綴つて」とあるので、明治十年（一八七七）から明治二十年（一八八七）の間とされる。

史料10

小生の母　の生家はお城の南に當り、其家のあつた邊は一帯兵部省の敷地になつたと云ふ。お城に關する傳説がある、天守臺の下に以前お屋敷があつて、夜中に屋鳴がする又馬駈の廣場は無いのに馬を駆る掛聲が傳はり澤山な蹄の音が一度に響き渡る。當番のお殿さんがお手洗いへ立たうとすると見知らぬ小姓がチヤンと先きへ立つ、用がすむと何處かへ去つてしまふ。馬ン場は夜分には通るもので無い、若し丸に二つ引きの紋の提燈が向うから來れば屹度悪いことが起る。淀君の妄念が蛇になつてお城に残つてゐるので石垣の塀の上から睨むことがある。お濠の中には主が棲んでゐるから側へ近寄ると内から呼び込まれる。算盤橋のあつた時分其橋杭が邪魔になつて體を斜にせぬと通られぬ程大きな主がゐたが正體がわからぬ。以上は母の話である。

武三郎の母の生家は、お城（大阪城）の南側にあった。そのお城に関する伝説があり、天守台の下にあった屋敷から、馬の鳴き声や蹄の音がしたり不思議なことがたくさん起こっていた。また、淀君の妄念が蛇となって現れるということを話している。

大阪城は、淀君の終焉の地であるので、淀君の怨念が残っているという話が出ても不思議ではない。明治時代になっても淀君＝蛇・悪などというイメージは残っていたことが分かった。次に見る、『日本艶女伝』の中でも、大阪城に残る妖姫淀君の話が出ている。なので明治時代になると、淀君・蛇というワードにプラスして大阪城という言葉も加わり、淀君のイメージが広がっていったと推測される。

二、ヒステリー質な淀君

『日本艶女伝』は、明治時代から昭和時代にかけて活躍した詩人の児玉花外によって明治四五年（一九一二）に著された。花外は、明治七年（一八七四）七月に山口県に生まれる。社会主義詩人のグループの一人として活躍し、同三六年には『社会主義詩集』を出版し、発禁処分を受ける。昭和十八年（一九四三）九月、七十歳で亡くなる（20）。

これより、『日本艶女伝』の中の淀君の記述を見ていく。

史料11

妖姫淀君

陽春の花のふる頃、古今の強烈な艶女を思ふとき、雨の煙るか霞むが様な空に、宛ら光るが如に浮現はるゝ女の顔は、すなはち豊臣の淀君である。

日本六十餘州を掌にした大英雄秀吉も、一美人淀君の手腕のほどに閨中の外でも、時に飴の如く翻弄を為れた。

淀君の母は織田信長の妹で、元浅井長政の室で美貌海内第一、後勝家に嫁して運命の悪炎に焼死んだが、淀君は其の母の精美と、血と熱を受けた女性だつた。

天下関白の夫人とし、秀頼の母とし、高慢な心の中では、飽までも信長の姪たるを忘れず、詮方なく肌身を許しても、秀吉のを常に下司下郎と思つてゐた。況んや彩も勢もない貧崇爺、駿河の家康等みな眼中に無かつた。

然し、流石豊臣の運も、大阪城の白壁へ落日の影を射した、此の天下分目の関ヶ原の戦争には、一婦人の淀君は東西武将豪傑の間に、夭々としく高くけはしく、紅花一輪は匂つてゐた。

有名な世界の女王と等しく、淀君には驕慢で、肉的で、一面非常なヒステリー的であつた。併し此のヒステリー質が彼女を煩悶させたと同時に、その絶倫の美を増さしめ、其の肉的が恰も牡丹花の如に、猛烈なる艶味を帯びてゐた。

げに牡丹の芽のやうに、女に生れた佳人淀君は、最期は火を放つて自刃したに云つても、亦紅ゐの火焔の華やかな生涯であつた。強いヒステリーは所有天下の男性と、終に烈々の猛火とも闘つて果てたのは。

淀君のヒステリーも亦豪いとも謂はねばならぬ。

吁、大阪城をいろどる墨絵の松ヶ枝、現在も高く取廻らした白壁に

は、妖姫淀君が美しい眸が印し残るやうである。
淀君の墓は、大阪市北の大融寺に在る。白蛇が澤山にすまつて、土地の人は縁起の神と崇めて居るさうな。
唉土の妖艶女王クレオパトラは蛇の毒に死んだ。わが淀君の墓と白蛇、凄い魔魅をたくはへるのが奇ではないか。

艶女を思い浮かべた時、淀君が浮かび上がる。淀君は浅井長政と、織田信長の妹のお市との間に生まれ、お市の美しさを受け継いだ。秀吉と結婚して、肌身を許しても心の中では秀吉を下に見ていた。最期は大阪城に火を放って自刃した。その大阪城には今でも、淀君の面影がある。淀君は、肉的でヒステリー質でかつ、妖姫と形容されている女性であった。

そして、『日本艶女伝』には蛇の記述が見られる。『絵本太閤記』のような、淀君が蛇に変化したという記述ではなく、淀君のお墓がある大融寺に住んでいる縁起の神としての記述だった。百年以上経っても、淀君と蛇に結びつきがあることが分かった。また、肉的や魔魅、妖姫といった悪女をイメージする言葉も使われていた。

三、悪女のイメージのない淀君その二

『太閤記物語』は、大正七年（一九一八）に大町桂月によって著された。大町桂月は、明治二年（一八六九）に高知県に生まれる。帝国大学（現在の東京大学）国文科に入学し、文才に秀でており、在学中から文名を知られていた。大正十四年（一九二五）に五七歳で亡くなる（21）。これより、『太閤記物語』の中の淀君に関する記述を見ていく。

史料12

大明征伐の師

（前略）

同年夏四月、帳中第一の美人、淀君男子を生む。淀君は、浅井長政の未亡人にして、柴田勝家の妻となりし小谷の方の、長政との間に設けし女にして、秀吉の寵を一身に集めける婦人也。秀吉五十を越して未だ一人の実子を得ざりしに、思ひがけなく男子を擧げて、喜ぶ事限り無く、名を棄君と名づけてし掌中の玉と愛でけるに、同年九月、棄君、未だ結びあへぬ白露の、初秋の風にはかなく散りぬ。（中略）

この章は、秀吉が行う朝鮮出兵の前段階を記している。その中に淀君の記述がある。同年夏は、天正十九年（一五九一）の夏のことを言い、この年に淀君は秀吉との間に子供も設けるが九月に亡くなってしまう。

史料13

醍醐の花見

（前略）

文禄四年春三月、朝鮮の軍連戦して八道殆ど風靡し尽しぬ。英雄胸中閑日月ありといひけむ、太閤、名護屋の陣より京都にかへり、諸大名を相催して醍醐の花見をせばやと思ひ立ちぬ。（中略）三月十四日愈々その当日となりぬれば、太閤、辰の刻に伏見の城を出で、輿の次第、一番に北の政所、二番に三條の君、三番に松の丸君、四番に太閤、新たに得たる愛兒拾君と共に、五番は淀の君、六番は加賀の君にて、各々、輿添の守衛あまた引具し、行列華やかに醍醐の三寶院に着く。小姓等引きつれたる太閤のしりへに従ひて、うるはしき衣思ひ思ひに着かざりたる北の政所、淀君以下の女房達、ゆるやかに歩をうつして、花の下陰彼方此方と見めぐれば、その道の左右には緑の竹もて埒を結び、錦の幔幕を張りたるに、折りからの花ふゞきの、はら〳〵と散りかゝりたる、此の世のものとも見えぬ風情なりや。

この章は、秀吉が慶長三年（一五九八）に伏見の醍醐寺で行った、花見について記述されている。当日の輿の順番が記されていて、淀君は自身の子供である拾と共に五番目だった。淀君以外の側室や、正室の北政所などの名前もあり、花見が華やかに行われていたことが分かる。輿の順番は、『絵本太閤記』と同じく五番目だが、『太閤記』の記述とは異なっていた。

『太閤記物語』は、これまで見てきたものとは違い、淀君＝悪女、悪

者などをイメージする記述はなかった。

四、蛇性の肌の淀君

第二章で考察した、『絵本太閤記』の「淀君行状」は、嫉妬のあまり蛇に変化し淫心を制御することができなくなった。これから考察していく『おんな太閤記』にも、淀君と蛇を関連づける記述を発見した。今から考察する『おんな太閤記』は、昭和三十一年（一九五六）に沢寿次によって著された。昭和の時代には、淀君はどのような女性として描かれていたのかを考察していく。

淀君は、自身の美貌を保つことに熱心で、常日頃から美容体操や、南蛮渡来の化粧品を使ったり、牛乳風呂に入り美しさを保っていた。鏡を見て、自身の美しさに見惚れていた時、顔にシワができていることに驚く、という内容から話は始まる。

史料14

蛇性の肌

（前略）

二本のシワにヒス　急ぎ三成を呼びつける

「アラッ、どうしましょう」

淀君は、姿見の前に立って、あかず、美しい八等身の肉体をながめて、未亡人らしく自ら楽しんでいたとき、鏡にうつった自分の顔の中に、目じりに二本のシワがあるのを発見して、驚きの叫び声をあげた。

「三国一の美しい女といわれて、太閤のちょう愛を一心に集めた身が、何としたことでしょう。いつまでも若く、美しく、不老不死といわれていた私なのに、この目じりのシワは何としたことか。私の容貌に衰えが来たとしたら全国四百余州の諸大名を何をもって私の膝下にひざまずかすことが出来よう。ああ、私はどうしたらいいのでしょう・・・」

（中略）

激怒した淀君、とうとう持病のヒスを起こしてしまった。

「クヤシイ・・・」

（中略）

こんなとき女というものは、心の悩みを打ち明ける男性がほしいものである。淀君の心に浮かんだのは、いうまでもなく愛する三成であった。

「誰か、早く三成に登城するように言ってちょうだい」

淀君は、あわただしく三成を呼びよせた。

淀君が、自身の容貌にとても執着している点や、自身の美貌で諸大名を統一しようとしている点などは、「淀君行状」と類似していることが分かった。また、未亡人とあるので、夫である豊臣秀吉は亡くなっており、石田三成と親しい間柄であり、悩みを三成に一番に伝えようとしている。呼びよせられた三成は、淀君の話を聞いて一つの提案をした。その提案というのが、「淀君行状」でも登場した、金龍の法である。この法を頼んだ相手も、同様に日蓮宗の日瞬という僧であった。

史料14（続）

金龍の法で若返り　痛さもしのび手術台へ

（中略）

「判りました。そういうことなら若返りの法をいたしましょう。さてどのような法をいたしますか。私どもでいまてがけているのはいろいろの銘柄がございますが、まず最も効目のあるのは金竜の秘法と申すものです。その国一番の霊山に登って厳窟にこもり経文を誦して天より金竜を呼びよせ修行する方法。この法によれば老人といえどもたちどころに若返って来る」

「その金龍とやらいうのをしてもらいたいのだけど、富士山の山頂に登ったり、竜とインタビューすることは私には出来そうもないわね」

淀君ちょっと首をかしげて考えこんでしまった。そこで、日瞬、待っていましたとばかりに。

「ご心配遊ばしますな。地獄の沙汰も金次第ということがあります。事と相談によっては、委託で法を収めることも出来る仕組になっております。」

（中略）
「なるほどね、それではひとつお願いするわ」
「毎度有難うございます。さっそく淀君の内股の肉一寸四角を切らせていただきたいので・・・」
（中略）
「ちょっと恥ずかしいのだけど、ええ、いいわ。若返るのだったら我慢するわ・・・」
淀君は、白玉のような肌を緋の布につつんで、急造の手術台の上に横たわった。
（中略）
日瞬は、一瞬、大理石のように美しくなめらかな淀君の全裸を目の前にして溜息をついたが、やがて気をとり直して、短刀をひらめかし淀君の内股から一片の肉をそぎとっていた。

自身の肉を削ぎ落とす、という強烈な方法に一度は躊躇した淀君だったが、若返ることができるならと言い、覚悟を決めたのである。このことから、自身の容貌や、美しさへの異常なこだわりがあることが分かった。
淀君の内股の肉を携えた日瞬は、富士山に登り経文を唱えた。すると、晴天だった空が急に曇り、雨風が強くなり雷と共に一匹の大蛇が現れた。日瞬は、大蛇に食べられそうになりながらも、淀君の内股の肉を大蛇の口の中に放り込んだ。すると、今まで暴れていた大蛇が急に大人しくなり、そのすきに日瞬は大蛇の下腹部の肉を一寸剥ぎ取り、それも持って急いで淀君の元へ帰った。

史料14（続）
淫心満ちる若肌　淀君、大蛇の肉を移植
（中略）
日瞬、富士山頂から持って来た大蛇の下腹部の肉一寸四角を、ピンセットでつまんで、淀君を内股に移植する。
（中略）
「ワアー、私、若返ったわ。目じりのシワがすっかりとれてしまったわ」
淀君、若返ったことおどりして喜んだ。
「私、二十歳のころの若さに帰ったわ。なんとこの二の腕の白さ。乳房の盛り上り、このやわ肌をこばむ男性が日本中にあるだろうか」
「いやその若さなら、日本全国の諸大名、淀君の尻の下にしかれることでございましょうまさに大願成就。全国に淀君旋風が吹きまくって、太閤なきあとも豊臣の天下は安泰であること、疑いもありません」
（中略）
昔のようなツルツルとすべる餅肌をとりもどしたが、冷凍植皮術の効果でさらに肌に蛇性を思わせる妖艶さが加わった。
これは蛇の肉を淀君の体に移植したために、淀君の肉体に蛇のような強烈な精力がわき起った。そこで性質は一変、淫心起って素行は乱れて来た。
（中略）

淫心を制御することができなくなった淀君は、目に止まった小姓を「そこにいやる小姓のなにがし、近う近う」と呼び寄せ、断れない小姓と盃を交わすこともあった。また、美しさを取り戻した淀君が、三成を呼び寄せる回数は増え、三成を困らせた。
第三巻の「淀君御乱行」になると、関ヶ原の戦いで最愛の三成が亡くなると、大野修理之介のことを可愛がったり、当時人気だった歌舞伎役者とも関係を持っていた。また、金龍の法を施した日瞬は、淀君のことを好きになり、淀君が修理之介といる所に押し入った。日瞬の一方的な想いは、淀君には理解されることなく、押し入った際に淀君によってカンザシで刺されてしまっている（22）。
以上のことから、江戸時代に出版された『絵本太閤記』の「淀君行状」の内容は、百年以上経った、昭和の時代になっても、『おんな太閤記』の「蛇性の肌」のように伝わっていたことが分かった。また、日瞬との一連の事件は、『おんな太閤記』のみに記述されていた内容だったので、エピソードは加わっているが淀君の性格やイメージは、変化することなく伝わったことが分かった。

おわりに

この卒業論文において、各時代の淀君がどのような女性として描かれてきたのかを考察してきた。以下に、改めてまとめてみる。まず、一六二〇年代前半に書かれた『川角太閤記』と『太閤記』では、淀君の生い立ちなどが中心に描かれていて、悪女をイメージするものはなかった。次に、寛政九年（一六七九）から享和二年（一八〇二）に出版された『絵本太閤記』では、淀君へのイメージが大きく変化していた。まずは、関白秀次事件への関与である。石田三成と共に共謀して、自身の願望のためだけに関白秀次を、亡き者にしようとした。そして最大の驚きは、「淀君行状」の中の淀君である。嫉妬や、日頃の悩みによって容貌が衰えた淀君は、日瞬という僧侶に頼み、金龍の法という怪しい法力によって美しさを取り戻したのである。美貌を取り戻した淀君は、複数の男性と関係を持つようになり、淫心を制御することができなくなり、最後には蛇の姿になってしまう。そして、寛永五年（一八五二）から慶応年間（一八六五～一八六八）に出版された、『真書太閤記』にも関白秀次事件への関与があったことが記述されていた。以上が第二章で考察したもので、淀君が亡くなって間もない頃に成立したものには、淀君の記述は少ないことが分かった。『絵本太閤記』が出版された頃から、次第に淀君への悪のイメージが広まっていったと思われる。

第三章では、まず明治時代に出版されたものを二作品とりあげた。「浪華民俗雑談」では、大阪城で起こる不可思議なことは、淀君の妄念が蛇となったものと言っている。そして『日本艶女伝』では、艶女といえば淀君であり、ヒステリー質な女性としている。また、大阪城や蛇との関わりも記述されていた。明治時代になっても、蛇との関係は薄れることなく受け継がれていて、そこに大阪城という新しいキーワードが加わり語り継がれたことが分かった。一方で大正七年（一九一八）に出版された、『太閤記物語』には淀君を悪女と関連付ける記述はなかった。しかし、昭和三一年（一九五六）に出版された『おんな太閤記』には、『絵本太閤記』ととても類似している記述が見られた。このように、淀君のイメージは江戸時代に作られたものを中心に、広まっていったと考えられる。

今後の課題としては、『太閤記』と『絵本太閤記』の間で出版されたものの中で淀君の記述を見つけることができなかったことや、醍醐の花見の興の順番が『太閤記』では二番目、『絵本太閤記』と『太閤記物語』では五番目と異なっていたことを追究できなかったことである。この二点をこれからの課題としたい。そして、平成から令和となった今、淀君がどのような女性として語り継がれていくのかも楽しみである。

注

（1）福田千鶴『淀殿 ―われ太閤の妻となりて―』ミネルヴァ日本評伝選、二〇〇七年、桑田忠親『人物叢書新装版 淀君』吉川弘文館、一九八五年
（2）堀智博「秀吉と女性 実像編」（『秀吉の虚像と実像』笠間書院、二〇一六年）
（3）金子拓「秀次事件の真相 実像編」（『秀吉の虚像と実像』笠間書院、二〇一六年）
（4）谷徹也「関ヶ原の戦いから大坂の陣へ 実像編」（『秀吉の虚像と実像』笠間書院、二〇一六年）
（5）「太閤記」（ジャパンナレッジ『国史大辞典』）
（6）「小瀬甫庵」（ジャパンナレッジ『国史大辞典』）
（7）安江良介『太閤記』岩波書店、一九九六年 巻十六 惣構之内へ出入人々奉行事
（8）阿部一彦『『太閤記』とその周辺』和泉書院、一九九七年
（9）「川角太閤記」（ジャパンナレッジ『国史大辞典』）
（10）「絵本太閤記」（ジャパンナレッジ『デジタル大辞泉』）
（11）「武内確斎」「岡田玉山」（ジャパンナレッジ『日本人名大辞典』）
（12）「醍醐の花見」（ジャパンナレッジ『国史大辞典』）
（13）飯倉洋一「『絵本太閤記』「淀君行状」と『唐土の吉野』」（『大阪大学国語国文学会』第百十四輯、大阪大学、二〇二〇年）
（14）堤邦彦『女人蛇体 偏愛の江戸怪談史』角川学芸出版、二〇〇六年
（15）「道成寺物」（ジャパンナレッジ『国史大辞典』）

(16) 国立国会図書館デジタルコレクション　岡田玉山『絵本太閤記一五』楽成舎、一八八六年
(17) 国立国会図書館デジタルコレクション　高野辰之　黒木勘蔵校『元禄歌舞伎傑作集　上巻江戸之部』早稲田大学出版部、一九二五年
(18)「真書太閤記」（ジャパンナレッジ『日本国語大辞典』）
(19)「栗原柳庵」（国文学研究資料館　蔵書印データベース）
(20)「児玉花外」（ジャパンナレッジ『国史大辞典』）
(21)「大町桂月」（keigetsu1869.la.coocan.jp）
(22) 国立国会図書館デジタルコレクション　沢寿次著『おんな太閤記第三巻』妙義出版、一九五六年

史料1　安江良介『太閤記』岩波書店、一九九六年　巻六　勝家切腹之事
史料2　安江良介『太閤記』岩波書店、一九九六年　巻十六　惣構之内へ出入人々奉行事
史料3　国立国会図書館デジタルコレクション　近藤瓶城『改定史籍集覧一九』第六　川角太閤記、近藤出版部、一九〇一年
史料4　国立国会図書館デジタルコレクション　上原東一郎『絵本太閤記　下』石田三成智陥関白、成分社、一八八六年
史料5　国立国会図書館デジタルコレクション　上原東一郎『絵本太閤記　下』秀次公悪行、成分社、一八八六年
史料6　国立国会図書館デジタルコレクション　上原東一郎『絵本太閤記　下』醍醐之花見、成分社、一八八六年
史料7　国立国会図書館デジタルコレクション　法橋玉山『絵本太閤記』淀君行状、東京同益出版社、一八八四年
史料8　飯倉洋一「『絵本太閤記』「淀君行状」と『唐土の吉野』」（『大阪大学国語国文学会』第百十四輯、大阪大学、二〇二〇年）
史料9　国立国会図書館デジタルコレクション　栗原柳庵原編『真書太閤記巻之四』十二編巻之廿四　博文館、一九〇三年
史料10　三井武三郎「浪華民俗雑談」（『郷土研究上方』七巻七六号、上方郷土研究会、一九三七年
史料11　国立国会図書館デジタルコレクション　児玉花外『日本艶女伝』聚精堂、一九一二年　妖姫淀君　一七八～一八一頁
史料12　国立国会図書館デジタルコレクション　大町桂月『太閤記物語』新潮社、一九一八年　大明征伐の師
史料13　国立国会図書館デジタルコレクション　大町桂月『太閤記物語』新潮社、一九一八年　醍醐の花見
史料14　国立国会図書館デジタルコレクション　沢寿次著『おんな太閤記　第二巻』妙義出版、一九五六年